

個物の認識

スピノザにおける数学的決定論と直観知

柴田健志(鹿児島大学)

スピノザのいう「直観知」とは個物の本質の認識である。それゆえ、「直観知」という認識の理解はスピノザの形而上学における個物の存在に対する理解を前提としなければならない。スピノザの形而上学の特徴は以下の①から③の順序にまとめることができる。

- ①一元論：現実に存在するのは「実体」およびその「変容」としての「様態」のみである。
- ②必然主義：「実体」の本質には現実存在することが属する。したがって「実体」の「変容」とは可能的なものの現実化ではなく、必然的な決定である。
- ③決定論：有限な「様態」は他の有限な「様態」によって必然的に存在に決定される。この決定の連鎖が無限に進む。

「直観知」との関連で重要なのは③である。「直観知」の対象は個物の本質だが、スピノザの用語法では個物とは有限な「様態」と言い換えられる。「直観知」が成立する存在次元は、無限に進むこの決定の連鎖であると解釈できる。ところが、今日の有力なスピノザ解釈においては決定論の意味が誤解され、そのためこの解釈はまったく採用されていない。今日の有力な解釈においては、スピノザの決定論は機械論的決定論であるということになっているのだ。機械論的決定論は多数の個物の相互作用に適用される論理であって、個物の本質とは関連しない。それゆえ、この解釈を受容する限り決定論と「直観知」は結びつかないのだ。個物の本質はどこか別の次元に探し求められなければならないことになる。しかし、スピノザの一元論において別の次元など存在しない。この点は最近のスピノザ解釈(Lærke)においてあらためて強調されている。そこでむしろ、次のように考えなければならない。スピノザの決定論とは機械論的決定論ではなく数学的決定論である、と。この解釈によれば、スピノザの決定論の理解は「直観知」の理解に直結するはずなのだ。この点を主張するために以下の3点を議論しなければならない。

(1) 決定論と直観知

「直観知」の理解が決定論の理解に依存していることを『エチカ』のテキストにしたがって示されなければならない。「直観知」とは有限な「様態」の無限の連鎖のなかで成立するものであるという点を、スピノザは明瞭に述べているのだ。スピノザの決定論と解釈されているテキストは『エチカ』第一部定理28である。有限な「様態」は他の有限な「様態」によって存在に決定され、この有限な「様態」もまた他の有限な「様態」によって存在に決定され、・・・こうして無限に進むという内容だ。注目すべき点は、直観知について述べられた『エチカ』第五部定理40の注解にまったく同じ決定の連鎖が登場しているという点である。それによると、人間精神は「直観知」によってものを認識する限りにおいて思惟の永遠なる「様態」であり、それは思惟の他の永遠なる「様態」によって決定され、・・・こうして無限に進むとなっているのだ。すなわち、有限な「様態」の無限の連鎖の中で思惟することが「直観知」であると明言されているのだ。この点を認めるとすれば、「直観知」を理解するために不可欠なことはス

ピノザの決定論の理解であるであるという点を認めなければならないはずである。この認識にもとづいてスピノザの決定論を再検討する必要がある。

(2) 数学的決定論

有限な「様態」の無限の連鎖は「実体」の内的な「変容」によって形成される内在的な因果系列であると考えられる。ところが、今日の有力な解釈(Curley, Bennett, Yovel, Nadler, Garrett)によれば、スピノザの決定論は機械論的決定論とされている。有限な「様態」の原因である「実体」が、『エチカ』では「作用因」と呼ばれているからだ。たしかに「作用因」の通常の意味は結果に対して外在的な原因という意味である。しかし、スピノザの用語法における「作用因」の実質的な意味はむしろ「形相因」である。この点は最近のスピノザ解釈(Viljanen, Hübner)では特に注目されている。有限な「様態」の無限の連鎖が内在的な因果系列であることを明らかにするためには、この点をテキストにもとづいて示す必要がある。『エチカ』第一部定理16は「神の本性の必然性から無限に多くのものが無限に多くの仕方では生じる」というものである。『エチカ』第一部定理17の注解では「無限に多くのものは「三角形の本質」から「内角の和が二直角に等しい」という性質が帰結するのと同一の必然性によって生じるといわれている。これは事物の「本質」がその「性質」の原因であるという「形相因」の考えだ。スピノザは機械論的決定論ではなく数学的決定論をモデルにしているのである。古典的なスピノザ解釈(Delbos, Alquié)において、この点はすでに指摘されていたが、残念ながら十分には展開されなかった。これに対し、今日の有力な解釈においてはこの点がまったく理解されていない。そのため、有限な「様態」の現実的な活動とは別の次元に直観知が設定されている。しかし、その解釈はまったくの誤りであると考えられる。したがって、スピノザの決定論を数学的決定論としてあらためて見直してみなければならないのである。

(3) 個物の認識

上記の解釈を踏まえると、有限な「様態」の無限の連鎖は「形相因」による内在的な因果系列とみなすことができる。それは「実体」の本質である「能力」が多様化して個物の本質を生成する過程にほかならない。スピノザが「永遠」と称するのはこの過程だ。この決定の連鎖の中で個物を認識することが「直観知」であると考えられる。それが『エチカ』のテキストに合致する解釈なのだ。では有限な「様態」すなわち個物の本質とは何か、『エチカ』第三部定理7で明言されているように、それは現実に存在する「様態」の「コナトゥス」である。『エチカ』第一部定理36の証明がいうように、すべてのものは「神の能力を一定の仕方では表現」している。それが「コナトゥス」である。したがって、そこからは「一定の結果が生じなければならない」と証明は続いている。その根拠は「神の本性の必然性から無限に多くのものが無限に多くの仕方では生じる」という『エチカ』第一部定理16なのだ。つまり、無限の因果的連鎖の中にある有限な「様態」の現実的な活動それ自体が直観知の対象なのである。数学的決定論という観点からスピノザの形而上学を再構築することによってこのような結論がえられるのである。